



信州でテニュアトラック研究生活

新井 亮一



私は、文部科学省科学技術振興調整費「若手研究者の自立的环境整備促進プログラム」の平成19年度採択課題「信州大学ファイバーナノテク国際若手研究者育成拠点」において、テニュアトラック助教として採用され、平成19年12月より、信州で研究生活を送っています。このプログラムは、「若手研究者が自立して研究できる環境の整備を促進するため、世界的研究拠点を目指す研究機関において、テニュアトラック制（若手研究者が、任期付きの雇用形態で自立した研究者としての経験を積み、厳格な審査を経て安定的な職を得る仕組みをいう）に基づき、若手研究者に競争的環境の中で自立性と活躍の機会を与える仕組みの導入を図る」という趣旨のもので、平成18年度から毎年9～12大学で開始されています。

私は、タンパク質工学分野で学位取得後、タンパク質の構造に興味を持ち、主に構造生物学分野で任期付研究員を約5年間務め、さらにその後、タンパク質のデザインを志し、米国に海外特別研究員として研究留学しました。2年の任期でしたが瞬く間に1年が過ぎ、就職活動を始めた際に、今後研究だけでなく教育にも携わっていきたいと思っていたので、このテニュアトラックの公募は大変魅力的でした。そこで、いくつも応募しましたが、その中から幸運にも信州大学に採用され、長野県上田市の繊維学部キャンパスに着任しました。それから、約1年余りが過ぎたわけですが、研究環境としては、まわりの先生方の御協力や、科振費によりサポートを頂いたこと、キャンパス内に共同利用機器が充実していたことなどにより、セットアップを比較的順調に行うことができ、とても感謝しています。しかし、研究室と言っても、まだ自分一人だけで、研究の立ち上げには思ったより時間がかかり、1年目はなかなか思うように研究が進まないのも現実でした。来年度からは、初めての学生を迎え、ようやく本格的に始動するという感じです。また、さまざまな分野にわたる若手研究者間の交流はとても良い刺激となっています。生活環境としては、市内を千曲川が流れ、四方を山々に囲まれ、周辺にはいくつもの温泉があり、とても快適な場所です（冬の寒さは厳しいですが…）。地方では、豊かな自然のもと、のびのびと子育てできずし、都市部よりも比較的保育園に入りやすく、職場・住居・保育園を近接させて通勤・送迎の時間を短縮でき、研究と家庭との両立がしやすいと思います。

さて、私なりに、この日本版テニュアトラック制度の今後を少し考えてみたいと思います。まず、これだけポストドクが一般的になった今、アカデミックポジションの

モデルケースとしては、「博士学位取得→ポストドク→テニュアトラック助教→准教授→教授」が一つの主流になるのが望ましいと思います。学位取得後すぐに助教になるよりも、ポストドクとして国内外で新たな研究に挑戦し、さまざまな経験を積んだ後に助教となった方が、その後の研究・教育に良い影響を与えたいと思います。また、今、最も必要とされているポジションは、ポストドク後に大学や研究機関等に定着するためのポジションであり、そのために、より積極的にテニュアトラック助教などを増やす必要があると思います。単なる任期付き助教では、任期が後半になると就職活動に忙しくなり、落ち着いて研究を行うのが困難になってきます。その点、審査後に准教授に昇進する可能性のあるテニュアトラック助教では、将来を見据えて比較的落ち着いて研究に取り組むことができます。また、地方の大学こそ、このテニュアトラック制度をより積極的に導入し、ポストドクとして武者修行しさまざまな経験を積んで、まさに脂がのっている若手研究者を独立したテニュアトラック助教として採用するのがよいと思います。やはり、若手研究者にとって、小さいながらも独立し主体的に研究活動ができるということは大変魅力的です。国内外の優秀な若手人材が地方大学に集まる大きな動機付けとなり、地方大学における研究の活性化にも貢献できると思います。そして若くして独立し、自分の研究領域を切り拓いて成功すれば、さらなるステップアップも可能でしょう。このようにして人材の活性化、交流が進み、地方も含めて日本全体としての研究のレベルアップが促進されるのが望ましいと思います。できれば今後、地方大学に、より多くの科振費テニュアトラックプログラムのサポートがあればよいと思いますが、それがなければ制度として成り立たないのでは、広く波及し定着しうるものにはなりません。たとえば、以下のような条件、①独立した研究室、②ある程度の自主スペースの確保、③2～3年分の研究資金の援助、④他の研究室の機材も比較的自由に利用可、⑤数年後の審査によって准教授昇進の可能性などを基本としながら、現実的かつ魅力的なテニュアトラック制度を導入できれば、地方にも優れた人材がより多く集まるようになると思います。

今後、信州大学のテニュアトラック制度は、そのよいモデルケースになりうると思われます。これが成功して高い評価を受け、全国に波及・定着していくためにも、まずは自分がこの恵まれた環境を活かして一生懸命に頑張る、よい研究成果をあげていきたいと思っています。